

展示解説

「将棋馬日記について」

平成 23 年 11 月 26 日(土)
大阪大学大学院博士後期課程
正岡 義朗 氏



大阪大学の正岡義朗と申します。普段は高校の教師をしながら、大学院で研究を続けております。研究テーマは豊臣政権の政治機構で五大老・五奉行の成立過程について研究をしております。豊臣秀吉の時代を研究しているということで島本町の方から『将棋馬日記』の調査を依頼されまして、今回お話をさせていただくことになりました。今日は、『将棋馬日記』とそれを書いたといわれている水無瀬兼成という人物の活動を説明いたしまして、その後に徳川家康と将棋の関係についてお話していきたいと思います。

まず、この『将棋馬日記』という史料ですが、天正 18 (1590) 年から慶長 7 (1602) 年の将棋駒の制作記録になります。内容は、駒の種類、それから譲渡先が記されています。譲渡先というのが、公家・武家・僧・庶民、非常に幅広く渡されていまして、特に全種類の将棋駒を入手した豊臣秀次と、50 組以上の駒を入手した徳川家康、この 2 人が注目される人物ということになります。

この水無瀬兼成という人物なんですが、水無瀬駒を制作した、つまり駒の文字を書いた人ということで知られています。

『将棋馬日記』という史料は、人物名が列挙されている史料になります。出てくる人物は非常に有名な方ばかりで、見ていても飽きないおもしろい史料なのですが、註記がほとんどありません。なのでそれを調べるために、この時代に活動していた他の公家の日記を見てみよう、今回は『言経卿記』という史料を調べてみました。『言経卿記』というのは、山科言経という公家が書いた日記になります。言経自身も徳川家康や豊臣秀次から扶持を受けているということが知られています。

この『言経卿記』から、天正 13 (1585) 年には兼成と書のやり取りをしているという記事がありまして、この頃には既に言経と兼成は何らかの交流があったということがわかります。そして文禄 2 (1593) 年 9 月 6 日条の記事には、兼成が家康に扶持を望むということで言経に相談をしているというようなことが書いてあります。この 4 日後の 9 月 10 日条を見ていきますと、家康のところに行きました、そこで兼成と言経が会っている。この文禄 2 年の 9 月頃に兼成と家康の間に何らかの関係が出来ていることが明らかになります。このあとから『言経卿記』に兼成の名前が頻繁にでてくるようになります。

『将棋馬日記』によりますと、豊臣秀次は小将棋、中将棋、大将棋、大々将棋、摩訶大将棋の全種類の将棋の駒を得ている唯一の人物になります。他にも兼成に命じて、『象戯圖』を写させているということで、将棋や兼成と非常に関係の深い人物です。『言経卿記』からは秀次と言経の関係は非常に良好だったと思われます。実際に会っている回数だけでも相当数あります。秀次関係の記

事の中には、囲碁・将棋を行う様子も多くみられまして、秀次の愛好ぶりがよくわかります。ただ残念ながら秀次と兼成の接点というのは、この『言経卿記』からはわかりませんでした。少なくとも文禄元年に『象戯圖』を写させた段階では「将棋駒と言えば水無瀬兼成」というイメージが出来上がっていたことは確かだろうと思っています。このように将棋に関して非常に理解があった秀次に対して、叔父の秀吉はどうやら囲碁派だったようです。なので、『将碁馬日記』には秀吉は現れません。しかし秀吉の次の天下人になる家康は囲碁・将棋とともに愛好していたことがわかつています。

次に家康と将棋の関係について見ていきます。『将碁馬日記』によりますと、文禄 3 (1594) 年から家康は駒を入手しています。一度の入手数も、家康は 5 組くらい一気に頼んだりと異例の多さになります。駒の合計も 50 組以上と圧倒的に多いです。つまり家康は水無瀬駒の最大の所持者であったわけです。

家康ほどのネームバリューがある方がパーティーのようなものを開きますと、多いときには 30 人ほどが集まったりします。その中に碁打ちや将棋指しが呼ばれている事例が『言経卿記』には多く記されています。徳川家のいわば公式行事として行なわれるような集まりの中で、囲碁・将棋というものが盛んに行なわれていたということがわかるわけです。ここで、家康が手に入れた 50 組以上の将棋の駒の使い道を考えてみたいと思います。『徳川家康文書の研究』という家康がやり取りした書状を網羅している史料集があるのですが、そこに将棋の駒というのは一切出てきません。また、大変立派な水無瀬駒を家康からもらったら、もらった大名などは大切に保管していたということが自然に考えられるんですけども、水無瀬駒の現存例がその割にはあまりに少ないんですね。700 組以上造ってあったんですが、実際残っているのは 10 組程度しかないことは不自然だと思われます。なので、現段階では、家康主催の将棋会で用いるために、家康は将棋駒をたくさん注文したのではないかと考えられます。

最後になりますが、碁打ち・将棋指しについて見ていきます。囲碁や将棋を生業とするような専門家が生まれたのは、信長、秀吉の時代と言われています。『将碁馬日記』の頃には碁打ち・将棋指しが急増していきまして、文禄年間には彼ら専門家を呼び寄せて行なう囲碁・将棋会が盛んに行なわれていたということが『言経卿記』などからわかつてきます。この囲碁・将棋会の最大の主催者が徳川家康だったわけです。

以上見てきたように、この囲碁・将棋というのは、公家・武士に共通した数少ない趣味だったのではないかと言えると思います。家康は囲碁・将棋会を開くことで、京都での人脈を拡大していく、自らの政治的影響力を強めていったと考えられます。この将棋会を開く場合は、身分の高い公家も集まってくるので、使う駒もそれなりに格式のある立派なものが必要とされます。つまり家康主催の将棋会を支えたのが水無瀬兼成の作成した水無瀬駒であったと考えられるわけです。こうして、将棋趣味を深めていった家康は、江戸幕府を開くと、将棋指しの保護を行なって、江戸時代に将棋はさらに発展していきます。以上で、私の話は終わりにしたいと思います。どうもありがとうございました。